

自然と共に暮らす「もんごりや」

狩谷充郎さん



小美玉市で「かりや自然農園」を営む狩谷さん。マーケットでは「もんごりや」という屋号で合鴨農法で栽培した米を中心に、小麦粉、雑穀類、豆類、イモ類、野草茶などを出品しています。多くのお客様から、狩谷さんが栽培したお米は美味しいという声が届けられています。

さて、この度は、狩谷充郎さんに農業を始めたきっかけ、もんごりやという屋号の由来、合鴨農法について話をしてもらいました。

1. 生誕から農業を始めるまでの経緯

日本全国同じだと思いますが、昭和20年代から30年代のころは（狩谷さんは昭和28年生まれ）、今のように食べ物が豊富に無かったので、田舎で田畑のある家はどこでも自家用の米や野菜を作って自給していました。山の木を間引いて薪にして燃料にし、鶏や山羊を飼い、川で魚、うなぎ、どじょうを捕り、山できのこや山菜を採って、食の助けとするそんな生活をしていましたね。実家が専業農家ではなかったのに、農作業を本格的に手伝った記憶はあまりないのですが、親がやっている田畑について行って、あぜでよく見ていたので野良仕事は身近なものでした。そんな生活が原点にあると思います。

成人して再び農作業をやるきっかけになったのは、41歳の時に大腸がんを患ったことです。生活全般、特に食生活を見直す大きなきっかけになりました。無農薬の健康な野菜を食べるには、自分で作るのが一番と思い、畑を借りて野菜作りを始めたのですが、ちょうどそのころ福岡正信さんの「わら一本の革命」を読みえらく感動しました。やりたいと思っていたところ、「つくば自然農を学ぶ会」の立ち上げの報を新聞で知り、早速入会したのです。25年以上前のことです。その会で筑波山の麓の畑を借りて共同作業を行い、奈良の川口由一さんに直接来ていただいて、野菜・麦・イモ・雑穀などの、環境に負荷をかけない、無農薬無肥料・不耕起の栽培方法を学んだのです。川口さんの自然農は福岡さんよりも現実的でゆるやかなもので初心者にはやりやすいものでした。それ以来、畑は自然農です。



狩谷さんが自然農を実践する畑（胡瓜の栽培）

2. もんごりやの名前の由来

縁があって、30年ほど前に内モンゴルの騎馬トレッキングツアーに参加する機会があり、フフホト（中華人民共和国、内モンゴル自治区の省都）にある乗馬学校で初めて馬に乗り、テントを張りながら草原を馬で旅行するという貴重な体験をしました。それ以来夢中になって10回程モンゴルに行き、草原を馬で走り回っています。15、16歳の頃、棒切れ片手に気ままに草原を歩く羊飼いの少年に憧れる詩を書きつけたりしていたのですが、そんな草原の遊牧民の生活に対する淡い憧れが少し実現した瞬間でもありますね。乗馬も楽しいのですが、360度パノラマのモンゴル大草原で紺碧（こんぺき）の空に響き渡る馬頭琴の演奏やモンゴル民謡の肉声は毎回胸が熱くなるほど感動しますね。格別です。そんなわけで自称「モンゴリアン」で、屋号も「もんごりや」です。



（左：モンゴルの草原で馬に乗る狩谷さん 右：馬頭琴の演奏）

3. 合鴨農法との出会い、実践してみたの感想

自然農をやりたいくて定年前に仕事を辞めましたので、本当は畑だけでなく米作りも自然農法でやりたかったのですが、田んぼの面積が広くて、除草の負担に耐えられないと思いました。それと「つくば自然農を学ぶ会」の会員の一人や、山口県の友人が既に合鴨農法をやっていたこともきっかけになったと思います。合鴨農法のトップランナーである古野隆雄氏の著作を2冊買い求め、初めはほとんど独学でした。その後、茨城合鴨水稻会に入会し、

勉強会にも参加することになります。合鴨農法は上手にやれば除草の負担という意味では完璧です。合鴨農法とは、稲が成長する間、合鴨の力を借りて草の成長を抑制する農法です。電気柵を張ったり、テグスを張ったり、毎朝毎晩に餌やりをしたりの手間はかかりますが、飽きない米作りだと思います。一番辛いのは合鴨の出荷の時ですね。合鴨はマガモとアヒルのかけ合わせで人工的に作ったものなので、自然界には放鳥できませんから、処理しなければなりません。4ヶ月飼っている間に情も移りますから辛いですね。処理した合鴨肉を美味しく食べてあげることがせめてもの供養と考えています。



(左：電気柵とテグスが張られた田んぼ、右：田んぼの中の合鴨の群れ)

4. 狩谷さんが実践している合鴨農法の詳細

一反の田んぼにつき 10 羽から 15 羽の合鴨を投入するのが適当な数ですので、二反の田んぼ用に毎年 30 羽の合鴨の雛を用意します。合鴨の雛は寒さに弱く暖かくなってから 5 月 20 日過ぎに田んぼに投入しますので、種おろし・育苗・田植えはそこからすべて逆算して日程を立てます。この辺りでは 5 月の連休に田植えをするのが普通ですが、田植えは 5 月 10 日過ぎに、種蒔きはその約 1 ヶ月前で、合鴨に潰されないように中苗をゆっくり育てます。田植えが終わったらすぐに雛を買ってきて、一週間から 10 日間ハウス内で飼育し、親鳥の代わりに泳ぎの練習を 2、3 度行って、丈夫な鳥に育ててから田んぼに投入します。雛の飼育中は餌として、くず米・トウモロコシ・大豆・煮干しなどを細かく砕いてあげ、その他に、はこべなどの草も喜んで食べます。田んぼの天敵であるヒエが伸びてしまう前の田植えから 10 日以内に合鴨を田んぼに入れます。それから 7 月末稲の穂が出るまで合鴨はずっと田んぼの中です。8 月頭に合鴨を田んぼから回収しますが、毎日朝晩に餌をやって餌付けをしておかないと回収できません。その後は、1 か月ほど自宅で飼い、9 月上旬に処理して肉となります。そして 9 月半ばから 10 月にかけて次々と 5 種類の稲刈りを行い、天日で約二週間おだ干ししてその後脱穀します。粃で保存しておき、必要な時にその都度もみすりします。粃で保存しておくとも米の傷みが少なく美味しく食べられます。今年 (2022 年) はコシヒカリ、ハッピーヒル、イノチノイチ、マンゲツモチ、朝紫 (黒米) の 5 種類を育てています。



(左:田んぼの中の合鴨の餌食場、右:バインダーで稲を刈り取る狩谷さん(2021年撮影))

5. マーケットのお客様にお伝えしたいこと

無農薬で化学肥料の臭みのない健康な、本当に美味しい米や野菜の味を知ってほしいです。どんなに良い米や野菜を食べていてもストレスや悩みごとを抱えていては病気になってしまうでしょうから、食べ物は絶対ではないですが、健康の基本はまずは良い食生活でしょう。オーガニックの良い米や野菜を食べてください。

編集後記

私は毎年狩谷さんの田んぼで田植えか稲刈りを体験させてもらっています。一番初めに狩谷さんの田植え後の田んぼを見た時は、田んぼの中を泳ぎ回る合鴨の群れを目にし、今までそのような光景を見たことが無かったものですから、大変驚きました。そして今度は稲刈り直前に田んぼに行くと、そこに合鴨の姿はなく、たわわに実った稲だけがあり、雑草はゼロに近いほど生えていませんでした。田んぼの中を泳ぎ回りながら草を食べ、人の代わりになって除草をした合鴨の働きが分かりました。

毎年、狩谷さんの田んぼで稲刈りをした後は、狩谷さんの奥様が、田畑で採れた食材を活かした手料理、雑穀入りの玄米むすびや赤飯、野菜の汁物、漬物などを振る舞ってくれます。青空の下で皆で頂くご飯は、野良仕事で疲れた体に染み渡り、本当に美味しいです。また、時折流れるさわやかな秋風が火照った体を癒してくれます。それは、狩谷さんの話にもあったように昔の田舎では普遍的にあった自分で米や野菜を作り、それらを頂く暮らしの良さを知る瞬間でもあります。

狩谷さんが栽培する米、小麦粉、雑穀類、豆類、芋類、野草茶は、昔から食べ継がれてきた伝統的な食材です。それらを日々大切に頂き、健康で活発的に過ごせていけたら良いです。

編集 : クローバーファーム 大箸卓史

編集日 : 2022年6月28日